

山本唯一 著

『^{俳諧}江戸広小路

——影印・翻刻と研究——』

『江戸広小路』、付合文芸にかかわる研究者の間では、夙に知られた江戸談林俳諧の雄品である。加之、未だ完全に明らかにされたとは言い難い芭蕉の青年時代の、潑刺たる息遣も十分に伝えてくれる。しかしながら、伝本少なく、虫損もあつて、翻刻もまた不完全の憾を免れ得なかつた。しかるに今回、その上下二巻の完本が、著者によつて枚方の旧家の蔵書中から発見され、ここにその全容が明らかとなつた。

資料調査の苦しみは知る人ぞ知る。たとえ一部と言えども新しい資料が世に出るためには、歴大なエネルギーと気の遠くなるような時間が、永年研ぎすまされた学問的感性によつて組織化される時を待たねばならない。そのようにして、まさしくモデルケースの如く世に出た文献がここにある。以下、本書の内容を概観してみよう。

本書は大きく三篇に分かれる。第一は、

前述の片岡家蔵本『江戸広小路』全部の影印を掲載する。上巻巻頭教葉を欠き虫損部分もあるが、そのままの形で収録され、原本の佛を偲ばせる。

第二はその忠実な翻刻である。原本に欠けている個処は天理図書館本によつて補われ、非常に丁寧な翻刻となつている。この厳密な翻刻によつて訂正された従来の誤読・誤植も少なくない。

第三は『江戸広小路』の研究篇である。『江戸広小路』という俳書の性格を明らかにし、文学史上に位置付けようとする、いわば総合研究と言えよう。目次は次の如くである。

『江戸広小路』の位相

一 書誌と作家たち

二 虫損部補完

三 延宝期の江戸俳壇

一 『江戸広小路』と『江戸通り町』

『江戸新道』

四 『江戸広小路』の方法と世界

1 本歌取と抜け

2 人名の効用

3 座句破調

4 付合の構造

5 江戸讃歌

一読、著者の研究過程と主題が確実に構築され、具体化されているのを知る。すなわち、『江戸広小路』を生み出した人々を把握し、虫損部分をもとの形にもどし、背景を明らかにしてその中に『江戸広小路』を位置付け、内容を分析しつつその性格を明確にしたのである。

文学研究は、文献探索、読解・分析、そして内容的な研究へと展開する。どの段階も欠くことはできない。根のないところに自立はなく、自立のないところに創造はないからである。その意味で、本書『^{俳諧}江戸広小路』は、小著とはいふが、著者の長年月にわたる文学研究を、歴史的にも方法的にも凝縮し、典型的かつ普遍的に示すものと言えよう。

(B6版・二五八頁・文楽堂・三三〇〇円)

(沙加戸 弘)